

「雪と微笑み」

あ つじ てつ じ
阿辻 哲次 京都大学教授

漢

車のラジオから「早春譜」が流れてきた。「春は名のみの、風の寒さや」と歌いだすこの歌は、四季の変化に富む風土に暮らす日本人の、心の琴線に訴えかける美しい叙情性にあふれている。

ところで、童謡「雪」では、雪が降るとイヌが喜んで庭を駆けまわることになっている。わが家の小さなイヌも雪が好きで、白いものがチラチラ舞いだすと興奮し、なんとなくそわそわしだす。雪には生物を感動させるある種の美しさがあるらしい。

西暦一〇〇年に作られた中国最古の文字学書『説文解字』は、「雪」という漢字を「氷の雨なり、物を説（よろ）こばせる者なり」と解釈している。「説」はここでは「悦」（よろこぶ）という意味で、「説」と「悦」はどちらも《兌》をツクリにもっており、それで文字全体の発音を表している。二つの漢字はもともと発音が非常に近かった。

中国の古い文献ではこのように、ある漢字をそれと同一か、または非常に近い発音の漢字に置き換えて解釈することがよくある。『説文解字』でも「雪」（セツ）を「説」（セツ）に置き換え、それをさらに「悦」に置き換えて理解しているわけだ。雪は万物を喜ばせるという解釈は、「雪」を思い出させて、なんとなくほほえましい感じがする。